

第136回 三方限古典塾（'18, 2, 15）

呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その9）

1 徳性は、収斂沈着しゆうれんちんちやくなるを以って第一と為す。収斂沈着の中、また精明平易なるを以って第一と為す。大段収斂沈着の人は、含糊おおよそを恐れ、深険しんけんを怖る。浅浮子せんぷしは、光明洞達こうみょうどうたつすと雖も、徳を蓄ういえどの器にあらざるなり。（性命）

（意識） 人が天から受けた本性は、心が引き締まって落ち着いていることが第一に重要である。その中でも、すっきりして分かりやすいことが一番である。一般的に、心が引き締まって落ち着いている人は、あいまいになることを恐れて、心をはなはだ厳しくなることに気をつけなければいけない。もちろん、心が浅薄で浮ついた人は、いくら才気にあふれ深く洞察できようとも、徳を備えた器量の人とは言えないのである。

（余説） 収斂沈着はリーダーにとって必須の資質ですが、とかく周りから見て、分かりにくかったり、近寄りがたいイメージにつながりがちです。したがって収斂沈着に併せて「分かりやすさ」を大切にしたいと教えています。リーダーたるポストにいる人は、このレベルを目指してほしいものです。優れた才智は徳性を伴っていて、はたらく力となります。

（参考）中庸 27章「君子は徳性を尊んで問学に道る」

修養には、自分の徳性を尊び内に省みることと、学問や経験によって万物の理を究め外物から学ぶことの両面が必要です。陽明学は前者の徳性を尊ぶことに力を置き、朱子学は後者の学問によって外物から学ぶことに重きを置いています。

論語・為政 15「学びて思わざれば、則ち罔し。思いて学ばざれば、則ち殆うし」
思う＝「徳性を尊ぶ」こと 学ぶ＝「学問に道る」こと

2 我の過ちあやまを攻むる者は、未だ必ずしも皆過ち無きの人いまにあらざるなり。苟も過ち無き人の我を攻むるを求むれば、則ち身を終わるまで過ちを聞くを得ず。我は当にその我を攻むるの益えきを感ずべきのみ。彼が過ちありと過ち無きとは、何ぞ計るに暇あらんや。（修身）

（意識） 自分の過ちを指摘してくれるのは、必ずしも過ちのない人だとは限らない。過ちのない人に己の過ちを指摘してほしいと願っていたのでは、一生かかっても自分の過ちを耳にする機会はないであろう。相手が例えどんな人であれ、過ちを指摘してくれるのは、有り難いことだと思わなければならない。相手に過ちがあろうとなかろうと、そんなことを気にしている暇などないのである。

（余説） かつて自分の過ちを指摘されると、私の場合は反省する前に「そう言うあなたはどうかんだ」と切り返したくなりがちでした。そのために、いつまでもなかなか改まることなく、向上しなかったのだろうと今では悔やまれます。この言葉に出会うのが遅すぎました。過ちも失敗も、それ自体は無駄ではありません。要はそれを以後生かせるか否かです。それにしても、呂新吾先生はなかなか鋭いと再認識させられます。

（参考）呻吟語・修身「我を毀るの言は聞くべし。我を毀るの人は必ずしも問わざるなり。我をしてこの事いえどあらしむるや、彼は言わずと雖も、必ず言う者あらん。彼聞きてこれを改むれば、これまた一の業を受けざるの師を得るなり。」

3 過ちあるはこれ一の過ちなり。過ちを認むるを肯ぜざるは、またこれ一の過ちなり。一たび認むれば則ち兩過都てなし。一たび認めざれば則ち兩過免れず。彼の強弁して以て非を飾る者は、果たして何のためぞや。(修身)

(意識) 過ちを犯す、これが第一の過ちである。犯した過ちを認めない、これが第二の過ちである。一度過ちを認めれば、二つの過ちが消えてなくなる。認めなければ、二つの過ちを免れない。ところが、なんだかんだと言い訳ばかりして過ちを認めない者がいるのは、果たしてどういうことであろうか。

(余説) 前の章に続いて、これも誰にでも起こり得る過ちについての戒めで、その言わんとするところはよく分かります。しかし、その過ちを認めることは、即、身の破滅につながりかねない場合もあり、現実にはなかなか難しいところがあるのではないのでしょうか。

参考のように、孔子も佐藤一斉も過ちについては多くを述べていることも、そこの難しさを暗示しているように感じます。「失敗は成功の母」も若いうちの事です。

(参考) 論語・学而 8 「過ちては則ち改むるに憚ること勿れ」

論語・衛霊公 30 「過ちて改めざる、是を過ちと謂う」

・里仁 7 「人の過つや、各々其の党に於いてす。過つを觀れば、斯ち仁を知る」

・公治長 27 「吾未だ能く其の過ちを見て、内に自ら訟むる者を見ざるなり」

言志録 43 「昨の非を悔ゆる者は之れ有り。今の非を改むる者は鮮なし」

言志後録 17 「過は不敬に生ず。能く敬すれば過自ずから寡し。速に之を改むるも亦…」

言志晩録 233 「人の過失を責むるには、十分を要せず。宜しく二三分を余し、渠れを…」

4 世に処するには、ただ一の恕の字。己を以て人に及ぼし、人を視ること猶己のごとしと謂うべし。然れども以て尽くすに足らざる者あり。天下の事には、己の欲せざる所にして人の欲する者あり、己の欲する所にして人の欲せざる者あり。這裏またすべからく理会すべし。無限の妙所あり。(応務)

(意識) この世を生きてゆくには、「恕」の一字が必要である。それは、他人のことを我がことのように考えて、親身になって処することだと言ってよい。

しかし、それだけでは十分ではない場合がある。世の中には、自分はしてほしくないことでも、人によってはしてほしいと願っていることがある。また、自分はしてほしいことでも、人によっては、してほしくないと思っていることもある。ここを理解できるようになれば、尽きることのない人生の味わいが生まれてくるだろう。

(余説) 遠藤周作「生き上手 死に上手」(1991年・海竜社)に「善魔」があります。こちらの善や愛が相手には非常な重荷になっている場合だって多い。それなのに、当人は気づかず、自分の感情におぼれ、眼くらんで自己満足をしているのと言うそうです。その原因は、相手の感情への細かい思いがない事と、自己満足のあまり行き過ぎた事です。

(参考) 論語・衛霊公 24 「子貢問いて曰く、一言にして以て修身之を行う可き者有りや、と。」

子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ、と」

論語・顔淵 2 「仲弓仁を問う。子曰く、…己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ…」

呻吟語・応務 「肯て別人に替りて想ふは、是れ第一等の学問なり」

菜根譚・前 116 「人の過誤は宜しく恕すべし。而れども己に在りては則ち恕すべからず」